

原 著

## 職域成人における口腔清掃習慣と歯周ポケット形成との関連性

—産業歯科健診情報を活用したコホート研究—

山崎 洋治<sup>1)</sup> 森田十誉子<sup>1,2)</sup> 藤春 知佳<sup>1)</sup> 川戸 貴行<sup>2,3)</sup> 前野 正夫<sup>2,3)</sup>

**概要：**歯周病の予防に影響する口腔清掃習慣を、産業歯科健診情報を用いて縦断的に検討した。対象は、某企業の事業所従業員で2002年と2006年に歯科健康診断を受診した者1,985名（男性1,617名、女性368名、平均年齢40.0±9.2歳）とした。歯周病の評価はCPIで、健康行動（歯磨き、歯間ブラシおよびデンタルフロスの使用頻度、喫煙習慣）は自記式質問紙で調べた。ベースライン時の健康行動およびCPIの所見と4年後の歯周ポケット形成との関連性を多重ロジスティック回帰分析した。

2002年に歯周ポケットなしであった臼歯部セクスタントの7.3～9.5%、前歯部セクスタントの1.9～2.3%が、それぞれ4年後に歯周ポケットありに変化した。また、歯周ポケットなしのセクスタントが4年後に一箇所でも歯周ポケットありに変化した者と関連性が認められた要因は、1日3回以上の歯磨き（1回以下に対するオッズ比：0.68,  $p<0.05$ ）、デンタルフロスの毎日の使用（使用しないに対するオッズ比：0.41,  $p<0.05$ ）およびベースライン時の歯周ポケットの有無（なしに対するオッズ比：1.52,  $p<0.01$ ）であった。

以上の結果から、1日3回以上の歯磨きと毎日のデンタルフロスの使用は歯周ポケット形成の予防に有効であることが、また、歯周ポケットの保有は、歯周ポケットがない部位での新たな歯周ポケット形成のリスクとなることが示唆された。

索引用語：歯周病予防、歯周ポケット、口腔清掃習慣、コホート研究

口腔衛生会誌 68：21-27, 2018

(受付：平成29年8月30日／受理：平成29年10月27日)

### 緒 言

口腔の健康は、摂食や会話などの直接的な機能のみならず、生活の質を維持・向上するうえできわめて重要である。口腔の健康を損なう要因の一つに歯周病が挙げられ、成人期から高齢期における歯の喪失の最も大きな原因である<sup>1)</sup>。平成23年歯科疾患実態調査<sup>2)</sup>によると、歯周ポケット形成を伴う進行した歯周病は40～44歳で25.5%、55～59歳で46.2%と、40歳以降で急激に増加し、加齢とともに喪失歯の増加も認められる。また、近年、歯周病は糖尿病<sup>3,4)</sup>、心臓血管疾患<sup>5)</sup>、メタボリックシンドローム<sup>6,7)</sup>、非アルコール性脂肪性肝臓疾患<sup>8)</sup>などの生活習慣病と関連していることが明らかとなり、歯周病の予防は口腔の健康にとどまらず、全身の健康の保持・増進のためにも重要と考えられている。

歯周病は、歯周病原菌の持続的な感染によって引き起こされる慢性の炎症性疾患であり、自覚症状を伴わずに

病態が進行する場合が多い。歯口清掃を中止すると歯の表面にバイオフィームが沈着し、それが蓄積すると歯肉炎が発症する。この状態において、歯磨きによる歯口清掃を開始して歯肉辺縁部に付着したバイオフィームを除去すると歯肉炎は改善することから、歯肉炎の予防や改善には歯磨きによる歯口清掃が重要と考えられている<sup>9)</sup>。また、歯口清掃を怠りバイオフィームが成熟すると歯周病原菌が増加して歯周炎のリスクが高まると報告されている<sup>10)</sup>。さらに、短期間の介入試験では、歯肉辺縁部に付着したバイオフィームを歯磨きにより除去することに加え、歯ブラシの毛の届きにくい歯間部のバイオフィームをデンタルフロスや歯間ブラシで除去することが歯肉の炎症の改善には効果的であると報告されている<sup>11-13)</sup>。これまで述べてきたように、歯磨きおよび、デンタルフロスや歯間ブラシを用いた歯間清掃は歯周病の予防に効果的であることが明らかにされているが、使用する口腔清掃用具の種類や使用頻度などの口腔清掃習

<sup>1)</sup> 公益財団法人ライオン歯科衛生研究所

<sup>2)</sup> 日本大学歯学部衛生学講座

<sup>3)</sup> 日本大学歯学部総合歯学研究機能形態部門